

朝鮮王朝が編纂した高麗史書にみえる元の日本侵攻に関する叙述

孫衛国（南開大学歴史学院）

発表要旨

元十年（1273）から元十九年（1282）まで、元の世宗フビライは二度にわたり日本に遠征軍を送った。二度とも失敗に終わったが、相変わらず近世東アジアの歴史における大事件であり、後世に深刻な影響を与えていた。高麗の軍隊が元の遠征軍にとって重要な援軍であり、重大な影響力を持っている。「高句麗史」と「高句麗史抜粹」など公式に編纂された歴史書において元の遠征が記載されたが、その事件に対する評価は大きく異なる。小論は歴史評価の視点から、朝鮮王朝が日本遠征に対する認識を検討し、歴史書物の編纂を左右する思想と文化面に於ける要素を検討する。

履歴

1966年の生まれで、湖南省衡東の出身である。武漢大学、南開大学と香港科技大学で勉強し、南開大学で歴史学の博士学位を取得し（1998）、香港科技大学で哲学の博士学位（2001）を取得した。今は南開大学で歴史学院の教授として活躍する。訪問学者として韓国の高麗大学、アメリカのハーバード大学のハーバード燕京研究所や台湾大学などを訪問した。主に韓国歴史、中韓関係史、中国史学の歴史や明王朝と清王朝の歴史を研究する。

出版した著書は「王世貞史学研究」（人民文学出版社、2006年）、「大明旗印と小中華意識：朝鮮王朝尊周思明問題に関する研究 1627-1800」（商務印書館、2007年）と「明清時期における中国史学が朝鮮に対する影響」（上海辞書出版社、2008年）である。翻訳著作は「中華人民共和国における明と清の歴史に関する研究」（魏斐徳など著、上海辞書出版社、2009年）や「世鑑：中国伝統史学」（伍安祖、王晴佳著、中国人民大学出版社、2014年）などである。国内外の出版物で百を超える論文を発表した。

原著：中国語、翻訳担当：宋剛